六家集

山家 上
西行上人

太政官文庫
和書門
特別
三二二九六
九三
一八
類 號 函 架 冊

内閣文庫
和書
特別
三二二九六
九三 函
一八
類 號 冊 架

内閣文庫
番號 和 32296
冊數 18（17）
函號 特93甲 6

共十八

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

山家和歌集上

春

立春の朝よみける

年くれぬ春くへしとはおもひねにまさしくみえてかなふ初夢

山のはのかすむけしきにしるきかなけさよりやさは春のはしめは

春たつとおもひもあへぬあさとてにいつしかかすむおと羽山かな

たちかはる春をしれとも見せかほに年をへたつる霞なりけり

とけそむる初若水のけしきにて春たつことのくまれぬるかな

家々に春を翫ふといふことを

門ことにたつる小松にかさられて宿てふ宿に春はきにけり

元日子日にて侍りけるに

子日してたてたる松にうゑそへん千代かさぬへき年のしるしに

山さとに春たつといふことを

山さとはかすみわたれるけしきにて空にや春のたつをしるらん

難波わたりに年越に侍りけるに春立心をよみける

いつしかと春きにけりとつの国のなにはの浦をかすみこめけり

春になりけるかたたかへにしかのさとへまかりける人にくしてまかりけるにあふさか山のかすみたりけるを

見て

わきてけふあふさか山のかすめるはたちおくれたる春やこゆらん

そらこさて初雪

年のうちに春をとなりにとなへてもみえしかいくよなる雪の下水

題しらす

春しれと谷のほそ水もりそくる岩まの氷ひま絶にけり

なすまゝに何とかきてし海まさる雪消の水にみ山

海邉の霞といふことを

りうやくうし世にすむは立のそ旅ありとよ春霞

あけしは浦路遠よりかすみていかにまとて

波こえよかさみの松にみえつゝは積よりう霞なかわ

子日

君こよの人世にまつ代ふ人はいつも代よまつ代にまさ代え

み日よすうへつよ家あはさ代さて小松か代くるのさはかん

み日しよ家あるうひくのつよむて初若菜のあとゝをくみ

われもよ初子のあひものえれはへのりよへ

代々にとしりつ

けのまつかひぞうる初子世あひあ代松やへ代世のへん

雪中若菜

けさ雪にみゆれともしてゆけるん若つむのへ代にはまゝも

若菜

去日野八年の内には若つみて去八若菜世のもとへも

雨中若菜

去あ世のうけ若なせぬぬしぬれてつみぬるかみなぬまれ

若菜あまよれて方子もまてはこ世の中のもつし紙

わかもうひの人のあそれもうすの紙へつむ春のつむ

老人の若菜といふことを

卯杖つよ七草まてそ初よそれ逢そうけてつかの若菜

寄若菜述懐といふことを

若れはる春の野にも紙なかけて人よを世とやつてとむ花や

国立公文書館 National Archives of Japan

鶯はなきてはるの始の人々かつる
うくひすなきて雨にぬれたる鶯の声をよむといふなれはことに
　雨中鶯といふ心は
鶯はしのひ音をもらすなれはしきりに声は山きは
　夜中鶯
鶯の声さめ〳〵と鳴かさる竹のはやしにみえさりけるに
すみなれし宿にも鶯はきこえすなりにけれは
梅かえにしはしの鶯のなきけるを人かたりてさらにいはんと
鶯は花のさかりに絵かきたるを見ける時ともにしらせつゝ申れは
鶯と我とはなりにけるや花のうへにおもてもしらん
声のかはりたるにはあらはれてかさなりぬる花をあはれかなしみて花を鶯
きこえける

りし歌の花をかさねて関白殿のよみ給ひける詠は春の明けぬれの
生けりけるの声の花さかりにしてけるに花の梢の雑に来て鳴きし
行客よとはしけりて鳴く雑に立てかれて花と鳴く花はは
春霞の立ちこめて行くに絶へぬ雑よむ歌とやいへるなれ
　梅花
春まちて木にしまれ梅のにほひ通ふはる春なへにあれ
　山さとの梅といふことを
春雨にぬれて山里は梅の花咲きて梅花の香に
山里の人は梅の花の色にとまりてくれぬ人ぞかし
こゝに春は山の色を見て梅もなほ人ことに
さとは行くに道のへにて道のほとりにあり
梅の所にちかく

かしりて流るゝにほひをよそにまかすれは梅か香のひと
　庭先ならすうゐ梅はみてもしるかな
梅か香は山のこゝろに吹よせていはねん人のまよはまし
　いはねよなし山下水にゆかりある庭の梅かしに
　くらうひとかな
朱のあたりまかく梅咲ひらきてやさしきさまを結ふ
　梅よ鶯の庭すみかな
梅の木ゆくへて開いは鶯もあつしさまにけ山さとに
住わひし梅のあたりは鶯もなれにし梅かやとりまさるらん
　よひの雨中の梅
ひとりめかしての花の色うれしきをの梅か香ひしくらん
　かゝりさ柳の梅

何となく都をさして梅か香にほふなれはこそゆかしかるらむ
　山さとの春風ふけは大かたの人にかはりてゆかしきは
春風の都にふかれてむつれ人もまた我ぬ人のまみえし
　旅中海辺といふことを
何となく旅立つの都さへ天地東路によそへ海の辺さね
辺をは海の道さへ西とうつり中山を旅のつれつれに
　海辺
むつきのこゝろよみ雨のなかとひとりの上にかゝる
　山家よみてし侍る
山さとに住は住みよくつれぬらん人もかようて人もなきは
　萬代
萬代の水は岩ゐにしるすのよせてをしひとくよりくるくれ

宵ま月のくもりてかすみて
とめくておほろなりけるみちの露のさかりに春よの月

山里乃柳

山かけのいさ田かけてなほしむのこし柳

柳風にみたれ

見渡せはさかのうへにかけて風にみたるゝ柳の糸

雨中柳

春雨は風の聲まて乱れけり雨にぬれても柳乃糸

水邊柳

木の間にはつれなきみとり見えて風にそみたる河柳かな

待花忘他

またれつゝわすれぬ花を山桜花のさかりに花のおもひしらなん

独山の花の色の咲ぬるも花
咲ぬるも花咲けるに山苺かつきかゝるまつらん
花の咲初ん花
今こそは花咲けるまてもあはれを待ちて待さん
かけて山の花の山の霞の雨の露も花咲きしむらん
花のちらぬあはれさなみたるゝ
雲のはれくもりて花の雲まの花の色
雲もなくまた咲けるは花みちて雲の花
よし野山に花咲かはるゝ花の雨にこそ見ゆれ
花の色やもりゆかん花の雨にみよし野山
とまりてもの盛は咲きてふかくかはしにそ
雨のまにも咲めれは山花に風せぬ花のみ

よし野山桜かえたに雪ちりて花おそけなる年にもあるかな
わきてみん老木は花もあはれなり今いくたひか春にあふへき
花みれはそのいはれとはなけれとも心のうちそくるしかりける
白川の梢をみてそなくさむるよしのゝ山にかよふ心を
いつとてもみる春はよし月みる秋はちらなん
花ちらて月はくもらぬ世なりせは物はおもはぬ我身ならまし
よしの山こすゑの花をみし日より心は身にもそはすなりにき
あくかるゝ心はさても山桜ちりなんのちや身にかへるへき
桜咲四方の山をかぬるまにのとかに花をみぬこゝちする
花にそむ心のいかてのこりけん捨果てゝきと思ふ我身に
白川の春の梢の鶯は花のことはをきくこゝちする
ねかはくは花の下にて春しなんその二月のもち月のころ

佛には桜の花をたてまつれ我のちの世を人とふらはゝ
うき世にはとゝめおかしと春風のちらすは花をおしむなりけり
山桜霞の衣あつくきてこの春たにも風つゝまなん
おもひやる心や花にゆかさらん霞こめたるみよしのゝ山
のとかなれ心をさらにことゝもに散るをみてこそ春をおしまめ
よしの山この嶺のつゝきに咲花の盛にまさる春しなりけり
うらやましそひてみよしの山桜花のさかりにあはぬ身なれは
すその色もうつりにけりな花の山ちりぬる春のなこりをそ思ふ
今よりは花みん人につたへおかん世をのかれつゝ山にすまへと
　閑なる所にすみける比花見に人のまうてきけれは
ひとりこそ花みんと思ふにこゝろなく人のむれつゝくるそわひしき
花みにとむれつゝ人のくるのみそあたら桜のとかにはありける

かさゝしてやすらふなりける人のもとに山さと人
ましてさらにし聞てよみける
年経てみやこし物よりてもとの人にあれはかれ
花の下にて月をみてよみける
くもにまかふ花の下にてなかむれは朧に月はみゆるなりけり
春の明ほのゝもみるに鶯の鳴けれは
しのゝめやそゝのかされん鶯の鳴ねしけれは春のあけほの
春にはも花なくしてくゝせなきのさへ浪そくへき
よみけるに
このころも紀に年の春におなし何にかはそれかりはかへらまし
花見はさこそいひけれは
花つゝみにくとらせ侍りし時花をも添つけぬ和歌なりき

老木の櫻の所〻に咲けるを見て
わきてみむ老木は花もあはれなりいまいくたひか春にあふへき
屏風の絵を人〻よみけるに春の宮人むれて
花見ける所によそなる人の見やりて立てりけるを
よみける
木のもとは見る人しけし櫻花よそになかめて香をはおしまん
山寺の花さかりなりけるに昔を思ひ出て
よしの山ほきちつたひに尋入て花みし春は一むかしかも
修行し侍りけるに花のおもしろかりける所にて
なかむるに花の名たての身ならすはこのもとにてや春をくらさん
熊野へまいりけるにやかみの王子の花おもしろかりけれは
社にかきつけける

[illegible]
世の人の心盛なりけるころ[illegible]
[illegible]
をし
[illegible]
上西門院女房法勝寺の花見られけるに雨のふり
て暮れにければ帰られにけり又の日兵衛の局
のもとへ花の御幸思ひ出させ給ふらんと覚えて
かくなん申さまほしかりしとて遣しける
みる人に花もむかしを思ひ出でて恋しかるべし雨にしをるる
返し
いにしへを忍ぶる雨と誰か見ん花もその世の友しなければ

[illegible]
[illegible]
[illegible]
たてゝ[illegible]
[illegible]
世をのがれて東山に侍りけるころ白河の花ざかりに
人さそひければまかりて帰りて昔思ひ出でて
ちるを見で帰る心や桜花むかしにかはるしるしなるらん
山路落花
散りそむる花の初雪ふりぬれば踏みわけまうき志賀の山越
落花の歌あまたよみけるに
勅とかやくだす御門のいませかしさらばおそれて花やちらぬと

はなさく花のみたれ白川の宮のほとりやおもひわたらん
いつそはれ世のかりのあれは花とみえてゐとかりなん
年経つて待たとしのむ山桜心とさく待ちて今わ
より野山くもの下すむ人の白さ八重の桜花あさく[illegible]なん
山下風の木ずゑのうつむ花さかいける水そみ
春風のむものふくさまうつりてもりやしる色は吉野山に
さ[illegible]ゆけの嶺の雲ふかくはかりきるとうちなかむる
よし野山むつさくして見るかは月かるゝとみえ
はるはちね[illegible]はてても世すみまち花とあるみの[illegible]花の
くらき世をいうしめにしも春風のちるまいむとなむと
りうえめの枝をさそいてちわれもうきよ世とはしなかるゝ
はなさくものたまん木のりしま河とみえて我惜行き

さくもくちてもとよいくるはなの花ちる別れはのみれ
はしめて花の陰すむあたりとちる雲のかりくる
梢にて風の吹けはかれかんをつゝむ花のかけは[illegible]しくさのみれ
いろそふちりてあれは花の[illegible]きよをりて[illegible]春かけむ
木のまのはもしるゝむ人[illegible]ちるてあれは梢ともりはなさん
木ずゑのりものひかりもさくちれ山花ちるわ雲さ宇るる雲
雪もみちけは桜花散つかれともの[illegible]きまつ空の月
ちるもとはしまめやしあかれてみつ[illegible]雲のかけなるかな
春ふく桜ちるそちるもの風みれるゝむるかな
あまちは庭に[illegible]吹風のさゝすやうも惜みやめ
おもてをちんけふそ惜のむすめ我いのちせ雲の山のせ
山人月のまとすちる[illegible]ちりなむとはかれ月さいそく

よし野山桜にかゝる白雲は散なん嵐は晴すもあらなん
なとみえさすかにさけは匂ひともなくて風のまゝに雪
そゝきかへあとの見に来たしなけにぬれつゝ人もなき行
なさけなる桜はちりぬ嵐のまにまちるにまかせてまちし花をも
庭の花はけふに似たりとちるよみけるは
風あらみ梢の花のなかれ来て庭に波たつ白川のさと
白川の花の庭面白くはなけれはてみて
あるまたちる梢の花を見て遊ふ庭に清水寄せてかへる
吉野にこもりゐける比菴のまへなる花を
つくりゝれし
ちりもせぬ庵のまはり風に吹くしもいかゞにみちて
夜中落花といふことを伏見院にて人々よみける

春風のふきちらすなる吉野山あらしのさくらいくとせかへむ
風のおと花のなかりせはよしや散
山桜枝さすの花の浪の散らぬもなく散りぬるもなし
夜中落花
惜しつる夜はの嵐に咲てある散し残るとよみし人々
遠山残花
よし野山梢にみゆる白雲は咲ぬときかは桜なるへし
花のうた十首よみけるに
よし此山今はとつけしもちりぬらん白雲
山さくらみな咲くらむかわけいりて見る木の本にちりぬる
さくら咲にけりなとも吹きすさふ山風の
あきらけき桜のいろなれ嵐にも散らさりけり

もろ〳〵の花はさきにいたりてまれなれども此さかりの花のさかりは
初花のひらけむ事待わびて見物にまかりけれは
おもしろきまゝに此花もまたいにしへのゆかしさあはれ
いにしへしちれど桜のかくならむ[illegible]
風ふくまじきとまうして[illegible]
吹風のふきて桜にあまりちりまかふならん人のおもむ桜の
なりまくおもふらんものゝ色をこめてもひとつ深きゆかしき
おもし秋のめくりも[illegible]
嶺よりちらむいはむ木のもとに咲いでゝいとゝしき雲の嵐
山ちかきに乱れて此花のいはんかたなき[illegible]
ものちかく人のかへしあひて山もかひ[illegible]
おもてなしも紙かきていひつくし候

まちわびし人〳〵みれば此花のいろかうるはしき此花のちらぬまに

菫

野にいでゝあさぢふの春風雨にうたれて菫つみけん
ゆかしくむかしの田のくろに菫つむ人はいかならむ
さかりにひ
霞たちまよふ旅人の道の辺にひと折かざすものを
うきおもふさま
流水にうつろふのかはづのなく声は[illegible]

山路のつゝじ

ひらきて咲けるに[illegible]
ゆふ山のひるまにいりて[illegible]
咲山の岩かげにくれてとくるかけての[illegible]

款冬

さし過みし人々人にこしめされ清せてゝ山吹の流るゝ

山吹のむらさきに咲ける花みたれてちりもこそすれ

蛙

ま菅生ふる山田に水をまかすれはうれしかほにも鳴蛙かな

みよしのそ月もわかしぬるかけに盛なる人の蛙鳴なり

春のうちに鶉とくたかしたふ給

かはつなくゐての山吹ちりにけり花のさかりにあはましものを

伊勢の海わたりけるかなにみかはとはふさて

海道の春の草をふみて給跡ゝまたのみ

なくらん

ちりうき春潮のみ川わたりして流れもとゝめぬに川なん

三月一日

三月一日にて鶯けりよみける

春風はそめぬるよりめてたしとうくひすのみそゝなまさきそ鶯なく

三月清海のよ

春のはしめのかさね衣の日よりのはくらさ春のよ

かさねぬるあたゝかさの夕霞のなかにあはれなる

夏

限あれは衣かへけりさくら色の袖はむかしの色となりけり

夏のこゝろをよみけるに

ほとゝきす道もやけて山里にもみし人の心をそとふらん

水邊卯花

白妙にさいしみ流るゝ井せき流に寄する波や

山川のなみに流れて岸のうの花さくとやは人のいひける

夜卯花

ゆふつく月のさかりの卯の花のさきにほへるかきねなるらん

往還卯花

行ききのひとの袖にもうつるかな卯の花かきの道のへの里

無名のふる比郭公の初音を聞て

時鳥かへるさをしもおしまるゝ聞きもあかれぬ今日の初音を

不破関子規といふ心を賀茂社にて人々よみ侍

郭公卯月のいみにゐこもりて鳴けるやまたなく人もなし

夕暮郭公といふ心を

まちかねしまそのゆふくれ郭公きなかすはこそなにをうらみん

時鳥

門のやとをむかしを忍ふ時鳥なくてもきく山郭公かへらなん

郭公ハ聞ころさかりと時鳥こゑのひかりにこゝろみん

時鳥なけりんなきつるそらをおもひやれは月のみそのこる

人によみかはして

まつ人の心をしらて郭公はつねやよそに鳴すらし

郭公をまちて明ぬといふ心を

わくらはにまちて明ぬるみしか夜に時鳥聞ぬるさへそ恨る

時鳥まちそ明ぬる夜の更行く鶏のこゑしもうらみる

時鳥のこゑ聞てよみける

郭公きかぬ物ゆへ寝もやらて郭公山路をわけてゆかせは

待つれは初音の声そきこえぬるおもかけはかりさらにきこえね時鳥の

きゝとかん鳴くして郭公五月の山はみな声さへ

大井川鳴くての山ほとゝ郭公の色こそまさる雲のうへまて

郭公こゝろにちかくなりにけり山路まよはゝまたもかよはん

時鳥を

きかずとも待ちつけてこそ夜山出て来むに聞かされ

時鳥思ひもわかぬ一こゑを聞つといかゝ人にかたらん

うらひしけれよのことは時鳥いかなる世にもわすれん

郭公きなかぬ人のまつよしやかたるともなき昔ならん

卯のころ郭公を待と侍りしにみけるに

時鳥しのぶの里にさとなれよまた卯の花の五月まつほと

雨中時鳥

五月雨の晴まもみえぬ雲路より山郭公鳴てすくなり

山寺の時鳥まよひ　かしこにて人々よみけるに

郭公きかぬものゆへまよはまし花を尋ねぬ山路なりせは

五月の晦日に山さとにまかりて立帰りけるに人の

時鳥ふすまよせて捨てゝ出にしをうらみやすらん人の

戸つらしけに思ひけり

時鳥名残あらせてかへりしか聞捨るにもなりにけるかな

郭しけりす

空晴て沼の水かさを我とめてさすまこもかる五月雨の

まことおりて人の戸つくしとなりけり

五日

折にあひて人にひかるゝ菖蒲こそけふは沢辺の名をも忘るれ

ある野に中院とか申す所にあやめふきたる宿をみて

よ深の葉をかゝらめしくおもひてよみける

旅ちりやよりまれゐりあ楽とむあやめゝ人ゝ人らん
らりきれ徐ゝり此而やめ此緑よみけて人ゝ千市に紀の人らん
又月又日山寺へ人此けよいりぬまれいきそ所
あ徐つりしらわけ分み(て)しよ
西よのこいそう除あやめ年よけ世らゐ此やしよ所しら
みかへの此れうさいあやめ高よりよ于野りへの以夜有作ら
又月每の新の皃りよ出りけてやう伝うされりあやめ高はゝ
又月每
木とぬ入江の雨うよ羽のてむらそまよゝりく又月每此
又月每よ水海ゐるし守流修やくりてよりうりはの白氣
こ流しく吉里と見し及ゐりく流又さくりまりす又月每の此
除くしくとれの京とすありく日とのこくす又月每の此

東屋のとうやうのゐ此りつ木ゝゐぬよりのゝ又月每の此
又月每よ小田此子茵やいうらんあるれうさおわ絵よ作
又月每の比りし当代あり小田よ人ゝ東夕々あ水まいりう
あり而すそし又月每の井十文首にみ御人ゝまうかそ
又月每よ升すひおり新てり紀寺縁よれ衣に代重之
又月每ハいこう小川の信ゆりしいて人よ新くみ前すれて
水字鐵川とう此りうひら水海て真海人守よう又月每の比
ひろ鐵川口さらの沖のみおつく水うさそかし又月每此
不鐵川つうそのさしと沖よみそのゐやうし又月の比
木のの難波堀江の名すゐせいうみ自海て又月每の比
身とあしみ前のの第まうおゐてんりみん又月の比
水広まきれよくりまさみされて水の雨の淀川みまさ奈

又見あきそとやむ清水かけ此家しめや水のうきおもかけ通ふまゝ白糸
又月毎まさみし弁猶つきぬ流れたえず今もしかるらん
又月毎の暁夜見守のみ雨さて渓の南とすへ水ぞ流るる
水すゞしきされふりより名ま此流れとむる又月毎の言
又月毎い秋人まに乃此あそまかしさきしはしさきまのさ
又月毎い山田の井せの湖雨くしをすてはそれぞれを
深山ろ乃きよみよ傍の流末のうき陰にすむ又月毎の此
ひまもみするわるつかまくさ小川かな又月毎の水寄らん
しみりの川み
流水のこゑわりなやとは清くてゆくへの底波しすむ今
水邊納涼といふこと給ふ白川よみたる
水のちまよあつさ忘れて魚かは杣のとみのたもとぞ涼しかれ

深山水鶏
杣人の苫屋にやどりて夜すがら聞く水鶏ぞわびしき
題不知
夜山の夕ぐれ風の音はきよる此芽ならず
擣衣
うきおもひそれ我は今ぞ知れわれあさちまゝ海の音擣衣哉
夜中擣衣といふことを
露深き野にも擣衣の音かなしく聞えつゝ擣衣
夜の心を紙にかきて
み雨くさよ原の小露しら梅そへつゝしあやせぬと見つるを
擣衣深しといふことを
擣人の打つ夜の音まさにけふこそ千里まで聞えつれ

行路夏といふことを

も蘆わけ行おしわけし原をよくれてすゝむ其道の流
しけり
しけりするかくれ行とも旅まよふあるさえぬ中宿よ

題しらす

夏の夜は光みか竹のよつ迄ぞもえりもゆくゆく
夏の夜は月みるまゝにやすらはん蚊遣火も見ゆるかたの中宿

海辺夏月

夏の夜の苫の苫屋に月清し おきつ波あらふ新浦

泉にむかひて月よみし侍る

むすひあくる泉にうつる月影はあかぬしらへのなかをかな
むすひあくるまゝ涼しけれは夕清水にやどる影の月

夏の月おもしろきよみ侍る

夏の夜はとけし原にあかさとて月の光さえかすかなれは
山河の光にせきれそへる清流あかれ行すさみる夏の月

池上夏月といふことを

秋きても月ことにすゝしかれ行 蓮の池につらなれる

蓮池によみ侍ける

とのかに月やどる池にふかく澄み蓮の咲にけり

雨中夏月

夕立はかれは月も見えつらむ五月雨の中 蓮の露てら

涼風如秋

雨ことしも我すゝむ海みけしきあさけさに山の
雲風如秋といへし秋は白川あらなるる人

又水無月秋ありくるしくおもひかねくらま

松風のとこのみなみの石をさす水の秋ありたりけりの紹

山家待秋といへる紹

山さとは外面の真葛吹返しまつ人も秋紹待紹

六月祓

御祓して身のさきしわけつる河の世をやそなはりぬる縁しき

秋

山さとのうへめ比秋しらぬうへし紹

うき海くの露紹あはれ物ふく風もあきしらすとふ山道かな

山居のうしめ比あきといふ紹

秋も月に入つけ行も志しら人の山里も気色のうちみえま

しら紹しのさとりまて　初秋月会する紹人ことみえける

秋こゝろ身のつゆ空に身をまかせうれへて老ぬかん三日月

初秋の比よみ侍しを松風の音聞て

常よりもあはれなるは秋の夜の風につれて伴ふむかひちまし

七夕

いさこゝ越て庭の小萩に秋やまたしき猶まつるゝやおもひけり

萬ねかひ今日待つけて七夕はうれしきことをおもひやるらん

天河ふみの七日ならずとよ代々あめのくいみよ河水

身にしみるあまの川への夕暮は涼しき風やふきわたるらん

待つけてうれしからん七夕の心のうちそ空にしらるゝ

蜘の井ぐるしき紹みて

はかなきのちりてまでいくたびや七夕まつることぞ紹

萩よ花道紹いへるにてよみし紹

りて錦おりしく人そしらね玉洲て色よりあさく萩かつる

野径秋風

まくら吹風は野よりも色まさるあきしる萩の下露
草のむら時雨しらしりてし哉

いとゞまされぬそれ露のかゝるものゆへやるゝ蘭くらみ

行路萩花

ゆくそでも袖にしも露そこはかとなく萩のしげき野路の旅人

霧中萩花

をくに高みみ山のすそに秋も霧深くさこそあれとも赤き色
錦の野のひとつみどりしらしぬ哉

乱れ咲野への萩かしらぬ露そ霧まに袖とそみえてぬれる

萩野よみける

咲そむるころの野へにあらぬ色は萩かはなにもみるへく

萩野の露よみてしけるに哉

かそらる庭もやそ野への萩かゝる錦かさよみ哉

野萩似錦しらふ哉

けふそしるかうの野よおもふ錦萩咲のへよまさるらむ哉
萩のむ錦よみける哉

しけりしもしめのかの下草よおもひまさるゝやすらはしき道

薄路よおさくしげりしといふ哉

もかゝるあはれそ露にしみはて道の後しるけれど

古籬刈萱

籬あれて露のねからぬやとしけきの下にみゆるかり萱

女良花

をミなへしなつかし袖とおもはゝや露のミぬるゝ花をミるらん
ところせき色めく野への女郎花はなのミやかにおもひいれけん

草花露重

とふ人もみれは露のすかゝに折かけてをきそふ露をかさねてそみる
大かたの人の露には思はれて袖のみぬさきをかさねてそみる
女郎花も常に露けしいへしな
むらさきの露の白玉ぬきとめて折袖ぬらすところもなし
おもかけに袖そぬれつゝあかなくに露むすひおくあきのしら露

水辺女郎花

池の面に影みえてよそにうつりて水のみなかミそこにみえつゝ
くもりなきひかりをうつす女郎花池のみきはにあらはれにけり
女郎花も水にうつしてみよ

とみえし池のさゝ波に枝ひちて物思ふ人の袖かなとみえ

萩

おもひよるもの萩をさこそゆかしけれ萩みたる秋の夕くれ
ところせき花の末葉の露ならて萩か花みる秋の夕
萩の風露の紙のしらへ
とよみし萩咲野への夕ころも袖しほるなる萩の上風
隣の夕萩の風
わきてさそ萩の下葉も花のいろにそむる秋の夕くれ
あきのうつりに中まなかは
吹にけり秋のあはれをしめてとまらぬ秋の夕暮
なかめつゝ秋にいろかれのあはれをすゝむる萩の花
何となく秋になりゆくけしきかな秋の夕暮

何となく物かなしみは思ひしることそ雨の秋の夕くれ
世の家のあさのよ
ねさめしてすきまの風にいかならん秋きてよ寒くなりなん
わさのうきよ落とともにそ
たえず落る何のすかたもむかしにていさみさそふ
山里に人まちえて秋風きよみけり
山里のかり雲井の昼のあはれさもなみ路に秋の夕暮れ
人こそあるきのうき十五夜にみけり
ましてかくなれて武蔵野は草のはら秋風の袖
ありまつしきて落ちる時もなれてまたよるそむ
ひとそその人の袖にみえもあはれ虫の音も聞つゝわ
萩の花咲くそのはらのとみ(?)たか秋の夕くれ

晴雨うたしも山の霧の中にてよ秋ならは麻のへおとろく也
さそらの橋の幽みふけ雨さして山への
麻のはら秋くさのよるあそひつの月にすみかわたる
床のうへの月のみさえのゆく山のよみ(?)たる
いつの庭の小萩の白露とひかえてある秋風よの月
何となくいとゝ心にとまる秋みなさまたく秋の山

月

秋の夜はいたく雲のうへにて新月の夜の月夜哉
あまの原月はその光の夜てをる時雨(?)ふかむ
これやこの清人ヽうちの山のはの秋風よの峰
中〜にいつもの月もかはらねと秋の夜の月
いつとてもかはらぬ海のあきのよの月見もさらになかりけん

しら浦やさとのみなとにさよふけてわたるかちのみ月遠さかるらん
月をみむしほかせさむみ海の面にかけはさえにけりしらなみのうへ
いさよひにいてしやまの月のかけくもりてそ山かせにつきにそみゆる
水の面にやとる月さへかはりけり波のたちゐにしほかせそふく
きくうちへやとりし山の月のかけかとそおもふはれゆく秋の月
ゆふかすみはれゆくそらにさやけくてなみまにすめる月のかけかな
あさからぬひとのこゝろのまことにもひかりそふらん秋の夜の月
秋のよの月のひかりもさやかにてあまのかはらにすめるさやけさ

閑夜月　経継

月すめとさしてもけふはさやかにてあらはれそむる秋の山かけ

海邊月

清見かたなみまの月もすみわたるみるめもかりのよるのうらなみ

池上月といふことを　経

見る人のこゝろもすみていけ水にやとれる月はさえわたるらん

閑居遍照寺にてひとりくみける

やとしける月のひかりもさえわたるよはのしつけき池のかゝみに

池のおもにやとれる月のかけさえてかはらぬみつのこほりなりけり

月池の氷といへること　経

水すめはこほりもしろくみえわたる池のおもての秋のよの月

名所の月といふこと　経

清見かた沖のしらなみ秋のよの月のひかりにすみわたるかな
あつまちのをのへのやまにむらさめのあとより月のさしいつるかけ

海邊暁月

那波のうら月のひかりにしらなみのよるはこほりとみえわたるかな

月前によしのゝ山をしのふへし給
白雨ふれは月のかけさへかくれてもいかてかみなそこのかけも
終夜月紙みる
誰こそねん月のひかりにさそはれて見はてぬ夢のなこりなりけり
八月十五夜
山のはを出るかけよりさやかにてすめる秋の夜の月
かゝれはこそこの月みるへき秋のなかはとさためおきけむ
天川なかるゝ月のいつくにかおもてあかしの月にしく
さやかなる影をそまつ秋風に月のよるのあはれなる
ちらはよしこそ秋風にかけいてその宿なる
あさからぬ一夜のかきりを秋の月
せひとせ十五夜のかけしもなかめてより月のかけ

くもれる十五夜紙
月みれはくまなきかけもつれなくて雲のはやくもかくれぬる哉
月哥あまたよみけるに
八ねんの春まに人の行しむかしの友をしのふ山のはの九月
待出て白河よりこの月みれはこそいつくの宿のひかりなる
秋風やあまの川原の絹かゝるらん天のかはらの月のかけ哉
いさよふ影をまちける月のかけ
よるさへあかれぬやこの月みれは昔のあはれなる
すみのほる風の月の秋風
出のやまかけの風さひしき月の
人も見ぬ山の末の月のかけ
木のまよりもりくる月のかけ見ゆる嶺の雲

いかゞせん今はとて袖にやどさん心のすみくる月はみくりの浦
くやしくも賤のをだまきくりかへし月はみがゝれてすみける
あれはつる草の庵よりも月と袖はうつしてすみあかつきの
月をみてくんうれしいはしへのあさましきにあかつきのあさ
かゝるしもとりのとりの中にあるかけそてすみある月はかな
よりなきしみ月こそ袖にやどりけれ昔の秋とおもへはあはれ
かくしれてわかのうけをそゆふしけれ行もうし袖と秋はよの宿
月清めて月に宿をかみてそれいはまするにまさるらん
月かけのかよふて山紙すめけれむしたるしやすむ物えと
あらぬかしに海ても行ぬるそよそるふたり月のかけは
月そ恋の月とおもしるまことそらあきすうかけはふかうき
夜こしも依ち出ん ひとりみそめことは心の月をまつ

月のすめるひかりは山の井の水かゝみとなりてすみけるかな
おほ海の原ゆく舟も山にあかれたる月のかけそふかき浦の波
有明の月のひかりは城のうへに秋にかはらぬ光なりけれ
中〳〵にしよしときくもる月かけさへてすみけるそれ
古へのしらぬ家のしのゝめに秋にあはれな月よみてあはれ
まくあかくをやすらん秋の夜は月のまへにすみけり
まかれはみかしくりかへしそのかひの浦にそ秋はの宿
なけきてはしよ月のあかきにはんやえまうるにえさむ
ふかきもおよ月の面より庵のかけとやとけりひらくる
おもかけしいまやん見えるにまいてすみえ秋にはた月
世にふかみめかれはあらぬめるの月のまえ
りつりよかけとすなる人にあれや月ゆりよ清見か原

中〳〵にくもるとみえてはるゝ夜の月は光のそふ心ちする
うき雲の月の面にかゝれともやかてそくもるわけかなからん
さやかなる月はくもらぬ秋なれは [illegible]
いくとせも [illegible] 月の [illegible]
をしむよの月のみかはる光えてすむ秋にこそ [illegible]
名高かりける月の光をまちわひて [illegible] その山のは
月さえてわたる川瀬は氷のうへにとまる白浪
天の原おもへはかはる色もなし秋こそ月の光なりけれ
かきりなく名におもふはゝ秋の夜の月夜なか〳〵 [illegible]

九月十三夜

こよひしも [illegible] 月の光りてまさる [illegible]
名に高き秋の半はすきしかと月はこよひそ [illegible]

後九月 [illegible]
月みれは秋くはゝれる年もありまたしるへなき [illegible]

月照 [illegible]
色深き [illegible] 月 [illegible] 白雲

久月といふ事を [illegible]
おもふことよくもあらて [illegible] の山

色間に月似 [illegible]
秋の月いさよふ山のはのみか [illegible]

月前薄
招くなる [illegible]
聞か [illegible] 月の光 [illegible]

月前萩

月をむしら秋ハへたてしむやとゝらん露すゝむ秋の白露

月照野花

月かすくハ草葉ハ露へての露のへるとも見えつらん

月前野花

むの也秋かけまうかへ秋の夜ハ月にの露かみたれる

月前草花

月の夜をおもへきねて女郎花ものいふののゝなくさめ
月のまた秋にさそはれてあきもなきの露のやとり

月前女郎花

庭さゆる月をわけゆく女郎花もなにあひかたみのそて

月前虫

月のすむあさちのすゝき葉かれてや秋をなくらん

夜なくしくかみそのもも月影に二荻が枝ハ松虫ハなき

深夜聞蛬

秋のよのや更ゆく月とともにつゝれさせてやきりきりすなく

田家月

夕かけにくる小田かりのそのまゝ月をやとる

月前鹿

まくらゆくさんからきしそれ秋よの月をむ嶺にしかのなく

月前紅葉

木の葉ちるおとの月かけやさよ紅葉とともにくれなゐのうつろひ

霧月秋へて川ともみへし秋

あさ山月をむ嶺にしひとすさすらの霧のたちなかれ

月前古秋よよ

いつくにつけて立出ん月をみる世すて人は
月にのせて外の友のなし
世中のうきをもしらてすむ月のかけは我身の心ちこそすれ
世中はくもりはてぬる月なれやさりともとみし世をもたのまて
いつくにも月はすむ秋は旅なれと人はからこそ思ふなれ
さしわけてまうけれて我とおりよ一種の心をとすと秋その月
様ていつくにも世を月のよをおそれをみくえにそみ
あなかしこ山よのことむへきるゝ月の心をおもしかす
昔はよ思ひわけにもわかす月なく旅人
ふりてけん人の世にそわれとかくみよ山よりあて
月寺のわかりにあさましるらむ
ゆきにまつ月にあひそへて旅に思ひやすらへ旅をおもてあはせて

人は住よしと思ひかへて月を頼みけり
いにしへの月おもひかへりみて月をさしても袖をぬらさん
故郷にある月を旅にかけて続けて旅人のきゝし
旅泊をわけりよし泊かそし
あまのとを教すへて詠しうつる月は旅かうれ
外海よすることのほかうみ月をも詠むへきなる
旅宿の月旅宿の心もつへし旅
月は秋よるなくしてはやらるへし秋はしらすひとへ第一の旅
月前の友は友よしもとくらし旅
これにいへるは心あるへき月に旅さて旅
んよりのありてあらたに一言の語ろうなるまみ
のこしやら不るに人にもつきをあしらせて人

くもりなき海をてらして出る月のかげをみて

波のうへにうかびて、かすかなる海のおもてに見えしを

浪のうへに月はあかくてさはりなく見えわたりける

わたのはらよりいでたる月のかげさへそみゆる雲もなく

旅宿の月といふことをよみける

あはれなる人のとふべきかたもなく雲のうへにすむ月

月やどるあしのまくらのしづかなる夜はなみのおとぞきこゆる

旅ねの月見ることよしあしのはにむすぶ露のしづくかな

船中初恋

沖つ風おほふ潮にこゆる舟人もしらぬ恋に袖ぬるゝ

朝に初恋ときく

あさまだき風に別れしかひもなくひとしほ袖のぬれぬる

夜に入て恋増く

うしとおもふ心のうちにさはるらし恋のゆくへも夕やみの空

恋隔遠路

白雲とへだてけりな門田の夜しもおもふ

霧中恋

むすぶのつまはみえずかなしき霧にへだてられ

霧上恋

空色のかはらぬよるの霧の間よりほのかにみゆる

霧

鶉なくをのゝあさぢにおく露の

霧行客といへり

名残ありてみじかき夜の霧にまよへる

山家霧

立こもる霧のまかきにはれやらて山人のあと

よそにみて行のあとさへ立霧のたえまやそこの所なりけん

鹿

さをしかの萩の下はに風ふきてよはに鳴なる

萩の花ちりしく秋は野分にもしかの鳴らん

我ひとりあはれをそへて聞鹿の声ならぬ夜の寝覚なりけん

さらぬたに秋は物のかなしきを鹿の涙にぬるゝ袖かな

山下風に鹿のねさそふ夕暮はいつもかはらぬ秋の哀れを

鹿すまふ空の気色にむかしより哀をそへて秋そかなしき

みやま松すさふ嵐に鹿のねをさそひて来ぬる山さと

小倉の麓に行かへる鹿の声そかなしき

よしをかへる秋山の峰のあらしのすさむ秋かな

暁の鹿

よはのねさめに聞はあはれそふ鹿のなく音の

月の夜に鹿ときゝて

あはれにはしかの音になく鹿の声秋の夕暮

幽居に鹿ときく

となりなき庵のあたりに鹿の声

田家の鹿

小山田の庵にきく鹿のねはいつもかはらす

人住て小野の庵のわけしかに鹿の鳴らん

鹿のねをきくにつけても行人のこゝろもそゝる山さと

獨閑擣衣

ひとりねのさむしろにおもふあきのよはころもうつなるこゑもかなしき

隣里擣衣

よそにきくとなりのさとにうつころもしづがやどりのこゑつくしつゝ

まちわびし人のすみかにおとしつゝうちかへすなるころもかなしき

けふは庭のあさぢにすみわたりて虫のねもかなしく

そのまゝ袖にむすぶ露けきよもすがら庭の虫のこゑぞかなしき

虫のこゑよみ侍りける

あきはやむかしの宿のこゑ聞くさばかりなるよもぎふの蓬かれ

秋の夜にかゝる浅茅の蓬の下に虫のなく声をきく

蓬生の宿の人は秋の夜の袖にぞ露のこぼれて

秋風のふけゆくのべに虫のねのしきりにきこゆ袖の露

虫のねもよもすがら鳴きてあきの夜は露けき袖の人ぞかなしき

のへに鳴く虫のこゑにぞ秋は来にけり

秋の夜にかゝる虫のねの声きゝて物思ふ人ぞかなしき

あさぢふにひとりねてきく秋の夜は虫の声ぞかなしき

秋の野に鳴く虫の袖に涙のこぼれて

まちわびてひとりきく夜の虫の声

ひとりねの枕の下に鳴く虫の涙にぬるゝ

蓬生のやどの枕に虫の声をきく

虫のねもかなしき秋の夜はふけて

秋ふかきよもぎの虫の声のみぞ

虫のねにさそはれてやあきの夜はねられぬ

物思ひにねられぬ夜はあけがたの虫の声

獨聞蟲

ひとり猶我友まちわひて蓬かもとに鳴虫のひとりなくよ

松虫

まよひくる人よわれやまつ岩根まつ虫の声

叢中虫

う露に生ふ小萩か下に鳴蓬生の庭の声

田家に虫をきく

小萩咲山田の庵の虫のねに落る涙や袖ぬらすらん

夕の庵の虫とふ人もなし

うらくすゝ人わかれ行秋の夕暮ハおもひそめけん宿

田家秋夕

小山田の袖まて露そこほれける風山風秋の夕暮

吹さわく風ましるに嵐まし山田庵の秋の夕暮

京極太政大臣中納言と申ける時白菊を見ひ

多しくさおほくそへて鳥羽殿にまひらせ

侍りけるを根の南殿のひんかし面のつほ

に植させけるに人々よみ侍りけるに公実卿の将

まゐらせし菊をそ見るかくこそあらんとはし

あはれく

天かけるやよのつゆに菊をえらふ仙人の秋のこゝろ

菊

いく秋に我かたのみし月影のかくれぬよはつゝむ八重の白菊

秋ふかく心もなきさ菊のかけそ見えける秋の夕

月前菊

まもりくる秋のこゝろに霜をかぬ月まてまよふ白菊の花

あき物へ渡りける道にて

心なき身にも哀ハ志られけり鴫立沢の秋の夕暮

嵯峨に住ける比となりの坊に申へき事ありて
罷りけるに道もなく葎のしけりけれは

立よりてとなりとふへき垣にそひてひまなくはへる八重葎かな

題しらす

いかなれは紅葉の色ハさしもなく時雨にうつる[illegible]

紅葉未遍といふ事を

いとか山時雨に色をそめさせてかつかつおれる錦なりけり

山家紅葉

そめてけり紅葉の色のくれなゐをしくれとみえしみ山への里

あきの[illegible]に松虫の声をきゝて

さらぬたに[illegible]松虫の声[illegible]

限あれはかれ行野へハいかゝせん虫の音のこせ秋の山さと

蓮台野に詣て侍りけるに紅葉[illegible]
よみける

さゆくに錦おりなすみ山[illegible]時雨そめけん

紅葉色深といふ事を

限あれはしのふハ色もあるへきを[illegible]時雨[illegible]
[illegible]の色[illegible]

霧中紅葉

錦そめあきの[illegible]へたつる霧の[illegible]

賤か家に紅葉の面白かりけるをみて

思はすによしある賤のすみかかな[illegible]紅葉[illegible]

寄紅葉恋

我なみた時雨にまさる色や紅葉は色の袖に染らん
おもはぬ人のつれなけれはしらぬ人のあるしに紛らはん
のりみち紛

ときはなる松のみとりも錦にそ紅葉そ秋はあはれ也遠

草も野路落葉

紅葉ちる野ゝ錦をてや人はむすふねまそ錦さく下
ゆきて乃来る清帰るこりれよきかな

大井川井せきにとむる水も色に秋深くなりにけるかな
とく山下のは秋乃色はあれとや楢も錦の帰るされ
我やし秋の楢紅葉かさねてなしゃ家のなしゃ
山ふかく秋の末しもなし家なりしらこゝろしれ佃

嵯峨野の秋のかみよとくしみむ紅葉ちるなるころのな
秋ゝの月なき山路のたらしむ今日のひくれ
紀東あきらけけむ
紅葉ゝ錦のあるさへさえ紅葉や春風もさそはなん

冬

長楽寺まて来る紅葉とそてこ事とて
よみくる

紅葉ちりつゝ時雨ふかき河原の中は時雨にもさらす紅葉ちる
非無月未葉紅葉ちらぬむらかた見出山への露

題しらす

ねさめするひとのふの絵の中て志らすそんなすくならら
十月ゝしめつさ山さゝ雨ふりまさりぬる

蓬の葉もかれ／＼にしらむ陰によみえて
名にしむ蓬が下も蓬があさましうしくもあるか

山家落葉

たのもしやまた木葉ちる山風におとはかはらぬ嵐なりけり
木葉ちれし月よりそあかきもとの山のかけより雨ふらぬなり

暁落葉

時雨かとねさめにきけはおもかけもゆかハ嵐にさそふ木葉なりけり

水上落葉

竜田姫織りのあやはいつくにか山川のみや

落葉

あらしはく庭の落葉は池水に流れて成ける

月前落葉

山下風の月に木葉をさそひゆきてまつのすゑにはかけもとまらぬ

瀧上落葉

木枯にみねのもみちやまつひてちりぬる瀧の白糸

山家時雨

やとりつる山の庵の時雨かなそてにほしあへぬ袖の時雨を

閑中時雨

とはれける人もなき山かけにかゝる時雨のうちにみえて

時雨のうちにみえて

落葉

あかやの木の間のさかり時雨ふるにしも庭のおもにみゆる

落葉

おもふにもあらしのみねのもみちはのちりしく庭にたつ人もなし

山家枯草 雅僧都比坊

くさのみちのり

うらめしすみれ露をかれてさひしき浦にはしらぬ
野の浦の花ちる音のいつかは絲林寺まて
よるはなりけり

さ夜ふけて咲けるしみのゐはまめすまむれはふか

枯野の草緑になるか

あきは袖よ露とをしめちしむすに折かけけき霜家
あらくくおもの声のこはまにしてくのそんとしも芦
あらかてりつくさむ萩の緑かく吹みやほの衣に

冬のきさよみけるまき

難波江の入江の芦は霜さしてうら風さむさまさるゝ
むへけりしものあしまはらへてあとゝいてさしく千鳥むかる

山桜袖あるれしはのみなけけにしまよかふみみのゆき
まのさよくちる人のみちかれて菴ちろく人のむかし山さと

水邊冬草

あきよあしてをあるこむち芦はあのさしくみゆつ難波江の
山さとの花すくなく絲みつるをなかりけりまた
玉藻さしもちはは海かりするれてさてしくみ手のみる雲

寄東路鶯

しかすかの花は春さめて有明の月のけさ嵐さぬ

山家冬月

冬されはさま嵐しけまる山さくら見はむしき衣くかれ
月出る嶺の木の葉にまかせてかはらしくもたむく
月かなる出のゆくへしゃす

むかしきく霜にやとりし新月はなかりしにあらけれ
氷しく沢の芦原風たえて月にまさりてしらけれ

志川よるよの冬月

霜こほる庭の木の葉はちりはてて月はみかきもいよいよ人なる

庭上冬月とこそいへ

さゆる夜もみしかき冬の夜半の月はけに水まさる庭の氷とこそしれ

鷹狩

あしひきの木の葉もしらす続きし犬のひく人は驚きかな

雪中鷹狩

かさなれる雪はいさしらすはみかりは鳴く遊ひとこそ人ありけれ（やう）
みかりする雪をしらぬとみえすりかりとりしなるかなのみえけら

夜神楽

月おちてまたあけぬ山の端のこえしもさえていつも有明の白雪

庭雪似月

庭なりし月のひかりとみるまてにそふよりも庭は白雪

宮の前霊山ふりつもる雪を見るにみよしの
よそのまつ初花けのさかさまに雪のみはえみ消えぬみ

枯野雪にうつしけり

風さゆるくさはのうへにみる雪のこほりかさぬるおきの葉のしたれ
雪ふりてみなしろたへにみえにけり
むかし山さとしくさきはまなくうつさん道とつけしか雪
人めのみうかれやとをつけすくまつりかなかれ跡の雪

雪道行

くるしかにまた降りしはしるかにはわれそ嵐の山にをとる

あさ比ら野人由くへとよしきおあそ
まへさきらる人のりし人宮ふかくてのちの
よつのくしけるに
宮ふかくうつもれてくれ志らて柏葉の跡志らし山路哉
宮朝待人といふことを
秋のよも庭にわかれの名のりをおしむ人のためにそみえん
宮は菴にのかれて世をのかれ面白からん
人のとひくるこそうれしけれとみんとてしける
みやこよりは離れて絹をたちて
人こりてけりそ宮をとみつれはあやしとや
宮鈴含夜といふことを
ぬるしもの鶏の月にさへあかれゆく志らせん

雪埋竹といふことを
宮にしらのこれ竹をわけてゆきのしたよりもすゑあれ
賀茂社源氏の家にかけて御ほうし御門
内裏よりしかしこきくれ竹のつゆは宮にそ
よわりて絹みて
こゝろをしる人とみせまつ竹のしたはおもひしれ
社頭雪
むかしさへあけはみゆる理にて宮ゐしるき松花の山
宮ゐもしてとよみて
何にしもくるしてふ物とすゝて山人は宮をしたふ
宮にわれて山ちとふるのみちをとはんの跡は花ならん
かの根山梅のはやいさ宮にきゝて根はおもひしれ

卯むのんらこれ山さと比ろくねの朱をうらむ白雲
おりるしぬめくら比かきのうをもしわれく雲おさなかりけり
よんさ君りくれけるる庭の雲ゐ絵のさかりくわ袖るし帰

舟中霰

せきりもらくあしまを舟んせまおれみちちしまききあくら

深山霰

松人のまろ比うるのかりしはどろみすち絹いおれ侘之れる
さらくのまゝおしれのしうりぶとみまく
たへおらそ枝をつくみ霰をつゝむ比ちるらして

月前炭竈といふことを

限あらむ宮ゐにさえあしめ炭竈比松よ月まちけるかな

千鳥

あくらうきいそ比らしわわかせく比汀風さむさ突
おくらつきやそ比浦ひ比夕暮まよ殿らわかゝすむ行く
さおわくんあらくそ冬あすあ千比千鳥友とくて行
霰にさせ汀ふかけつ風水ゆひあらけまぬくあちまれ
やせ川らみる比浦よ月まさて浦のかまよみちわくある

題しらず

みちわく志ら比しまくまむ月と波よりてみるくまな

氷留山水

先海せく本趣あらし山水をさかりくあは氷るらむ

湖上氷

水とるよ水や氷むすみんくうしよみてぬ湖の白氷

氷結といふ紙

氷はつ袋のさいのしゆられくりうやこゝろゆしなれぬ谷

冬哥十首よみける時

むすれぬ紅葉すとちる山さしきひとさぬ文よ人今は

ひとりすむこと山かけぬ友すれや嵐まちうつ冬の夜の月

崖の岡ぬ芦の丸なぬさひしさいみてそつきれしき人の行

こゆる駒いまそぬ見えそろしすめく氷をよけりそこ有ぬ池水

哥ありすゝ嵐の山よ風さえて大井ぬまさしよ氷そさそしく

はしはつとし風いうぬさむゝんかるまれみつゆ山さき嶺

山さよ時雨しぬのさひしさよおもれぬ黄ぬ時雨もうつ

風さしてよけれハやうそ氷のく之いはなまさ之暁ぬうく橋

すぬ山みつのよみつぬ雪ふりしむうみてやあらし雨ゝ

宿ゝこまさりけしにしゆけむへし能ことあうきる山さくし

題しらす

山桜ぬけりひとくるてさえしれぬ木よぬむひ吉野さうちえに

仁和寺のけむろうえし山家閑居見雪といふ

ことを読よ侍るに絵まつり

ふりつもる雪ぬ友そてあすそとそこに日ぬ遠く人まつ山ぬ庵

山さとよ冬深よして

とふ人ぬ絶ぬ雪をりそらとねりつ道とらしてそなをまた山家

山水雪といふ事ぬ

しのぬひとゝ人さしよおもしり雪よ嵐まさる流

世をとのれてくる日のぬかまゝやうくとかり

山ぬの氷そ水すてこゝらそとつゝまをまそ

いろうゆうちしよけつぬ閑てまち

いつかわれむかしの人といはるへきかさなるとしをおくりむかへて

陸奥国にてとしのくれによめる

つねよりもこゝろほそくそおもほゆるたひのそらにてとしのくれぬる

山家歳暮

あたらしき柴のあみとをたてかへてとしのあくるをまちわたるかな

東山にて人々としのくれにおもひをのへけるに

としくれしそのいとなみはわすられてあらぬさまなるいそきをそする

としのくれにかうやよりみやこなる人のもとへつかはしける

をしなへておなし月日のすきゆけはみやこもかくやとしはくれぬる

山さとは家のこゝろもすみうきにみやこしのはゝさひしかるらむ

歳暮に人のもとへつかはしける

をのつからいはぬをしたふ人やあるとやすらふほとにとしのくれぬる

恋

名を聞て尋る恋

あはさらむことをはしらてはゝきゝのふせやときゝて尋ゆくかな

自門帰恋

たてそめてかへるこゝろはにしきゝのちつかまつへきこゝちこそすれ

涙顕恋

おほつかないかなる人のくれなゐのあはれもそめてみゆる袖かな

夢会恋

なかなかに夢にうれしきあふことはうつゝにものをおもふなりけり

あふとみることをかきりのゆめちにてさむるわかれのなからましかは

ゆふつけし鳥のこゑはとしらねどもさしも別路の涙おち
たちかへりおもひおくらむそのかみのわかれを

後朝

とりのねに人はいづれとおもへれどもうきおもひ
おもひもしらぬ袖のさかりも道芝の露にわかるゝとこそしらね

後朝聞鳥

ふしみなる里にも恋ぬる人にてうからん河そひの

後朝見梅

うつゝにそこはかとなしにうつる色は梅のにほひそ人の

後朝霧

つらきかなたれ成はのなごりおしむやまちかく人の霧にまぎれて
ゆくさの河霧

いつはりとおもひわかるゝやまぢにも涙さへ袖の人よ

逢不逢恋

行かよふ今は河はてかはかりにうつろふ契りをもせん
ものうきはそれのやみに涙にもそれぞ人とさもおもふ

恨

うらみじと袖よりあまる涙つゝみしてはしと思はれ人のつらさを

久絶恋

つれなくもなかなかなるに恨みてもいつしかそれはむかしなる涙に

寄糸恋

あひみてのあはれはよそにのみなりてたえてもいくとせまでとぞ思ふ

寄梅恋

おもひやるみなとの梅の色香の句ひもうつるらむ

けふりは一えださかれし梅かえにさらてや袖にそみはけるかな

寄衣恋

つれなさの人にみせはや桜色にそめしはまたてしらぬ衣を

わすれんはよそにへたてゝつらさこそ恋のゆかりの衣なりけり

寄擣衣恋

こゝろは我と悩まされつゝ衣のうらみの人にあふよしもかな

寄海雁恋

つれなくも絶ぬる人の住むはなのうらみに海しほの付

寄草衣恋

枝そめし思ひわひしや我袖は荻の下葉の露にまさりて

寄麻恋

つまこひて人めつゝまぬ麻の糸のみたれし袖はみるかたもなし

寄莉萱恋

一方にみたれしかるよ我恋や風にまかする夜のみたれかる

寄芳恋

夕芳のへたてはさそふことつれなくも我そまたあかぬ

寄竹葉恋

りの雨の音によしくくやわか葉にも袖にあまる

寄荻葉恋

紙にしるさん風にまかせてかよふらん

寄氷恋

まなはしもたへぬれはあかぬ思ひとこほりはてなん

寄水鳥恋

紙袖の涙にぬれてなれしや池の鴛鴦

かものくらまはたゝさよしくしくよそへて付るによ
ひとくまそてそて山ぞ北へ遊して候
うけひきま定りてやむをかんかりそくさぬをある
商人よふる銭流るゝひとしいふて候
北なひね市の中には人おほみゆれと新そへてつる也

海辺　遊

浜のしくし鐘なるすのうつらむ定ありて道とて
九月ふて何おりて年　閏月といふ遊して云
こしるへくしよみ候よ
七月のおゆりよつてさんてそいむかしは云なおりてしむ
れあれの北賀歳は海りてわかくろよゆくし
としろ遊してといふて候へくよみ候へし

しろみあれ北おりく銭すくしてよ行やお月はんるうへく
同社にて神はある遊していふて銭弥よよ
よみ候よ
天かうれ弥北志しのおりすしとつれなき人はり来なん

月

月待しいひならむれつらしひかしのんれ也の神をま入おゝ
志てきりさこゝ弁北まそてよみ　月は乱と旅よやらさん
あれはみち人あしく初よいくすむ月の出そまやす人を
月みれしいそやしみゆに初りれてかんまつくとするらん
らうる北月ましられてみる北やさりしいふるい
西けれ北日より海さ別れかる名残と人の月よしあて
秋の夜北月やさみてゝとりろうんするときりけとりそやぬれ

天原さしのほりし光ハ清なくしてそ月の影をまさりけん
地神五代山花にけそへぬるかゝる月とそなかめあかして
月はみな花ゝそとよそにこそわかれけるよねる々恕
すさひけるしらぬ山はあかりし月のまへにぬるこそ名に
あしひきの山のあなたに光を凪ハのこす月とか海の波
おけしそ月や八物我ならすそゝらかすらハ秋かみさそ
えよいろて月にあらそふそりてひかりあはのゝいけ之きへ
白かねのいなつゝのか月けのさかりき神よりかくしつたひ
西ねのまみさ鳥とうか神のうゝよりまよやゝ花よの月
地神五代神まほ月ハやゝわたかさうつてゝきう水すゝき
うひさとりよちす月花けるれこそかけてうる沙
しきゝし沙花也ゝ秋をすてゝん花海よ月とやまん

うちみてとりけし沙よ秋神花こふかうて月とやまん
よし梅のよしのにみ花をとゝて袖かよ月花てかうやそ
沙花ゝ海のさき月そゝなりゆかあり花のとか枝の花
あやくよそてゝゝよ月花やとうかゝよ海ゝれてとけ枝よ
地きりけよ花の後なみうつゝよわ秋よ月花ゝかりかはかれ
よりすゝし月とみわかきり行てん花園の海よ係
秋代月物かよ人のよめそてやかけよ影とて人てそあらん
今そらう人のんゝ海よゝわ月ととゝゝみあり床
すみこ花すゝしか行月なれ花まれ花をて暁ましけ
ゝ海の行よ行けしゝ人ハ此ぞ当て人やと月をやうつゝ
地神五代人の海とのこひすてゝゝなれ月を春らけあ
しひきやとうくよくゝとあうゝ花それいろん秋てゝ月也

しきれし月とらむ所にあくかるゝ人みえてとこそよしまゝ
すゝむまゝかへるさむしさにおすけれ月と眺そおそれ
あかるそらすゝしゆくて此月の色よいゝかなるも紅葉のかれん
雨ふく此けりかさひ候ゆる月かけ計さへもおもたし
秋の月をの此秋のくふ様よりわさけきなるも満はあきらん
出すかしかく人おりあけのよまらやとつきうすあきらかにし

意

ねるいぬんのとよりうすぞしるへしてきそのぼりゆくとくとめ
うちむしきもおもかけ此雨は漂ゆるゝさまえみえわけぬ
出ていのあし地とこあそ何をしらてこゝゆまる此意まれ
とさし山をるの下葉もわ格んくさしをてる風はたく
歌くしさしもやく此とのつき哉とさふまよまゝとき

何しおくさきゝれいさ命ちゝあり人も思ひしとそ
きすよ哉らけ雨そ物と思ふは雨し命まつへておもやとせハ
あやめけ人をつゝそゝしいつせんもの時へ人よ後すとハ
かみさ川よううすうかみおすしおさき人めよつまさゝ涙
色つそ人めけみまさせつれなそて涙やる涙川
弛ちり八袖よちるし涙川いるみよおやおりらん
ちとゝひよなと妹く人と思ひへしよそ年出つりれ
中くまるれぬとゝの雨すし恨み中やつり雨し
何せむしつれなまりとしみかんおもふゝちりなしやせすや
むしてし誠ちとけさのむしひそ雅れかか地と思ちらん
行のさ此ありひもてらてしわさへてれぬ涙そわ
月をかれしつゝ此哀のおるをひるへ人なさ秋んまま

うきそつまさみさの御なみあしたにけるさらによ御なみすけしさきす
ぬれまへとらしぬへへよあつ物ぞ哀なりぬれちそれなれ
瓦代の松風みれし御袖まへまへむすまかれなわ
なれきわみえにけい人のあつ物ぞかへ言なつひかれき
なきことハうすまてしれぬ身の外へなとらしつん気ん
うきそみつ袖すけすの一歎俄なさみをてきつうさきすれ
遊くよおりしびみなまんにえハ尽をのすそつねあつむ
ぬれまへハ地てよんへそてけめつきのさの変れるてまきはきま
うきつ身まれハしれけむきもらねの思さへつくさ徒にも
ありつの我何のむらひの悔さそんせてもしつわかとちうん
うきさみさらんや高かれしくさハ哀へとちけしけわそ
身纔れれハ人のとらとハ平をぬるよ恨なおりさぬるか袖な

中へよねをつくさまくつぬれうしくさ恨ハみさをえそれ
人はらしるはさハ虚なるくき扇すえ法そいりよまへ家なき
月よそへそうしみハいとし古歌の仲さえそうの秋なみさなる
まうとよのあつ家わそわしたおそ志めれんとよ志のへとれとす
今そしろ哀おひかけし契わしハまれあと我植えそれわ
なまくつき波のこいとし粮そひて恨氏ひすや神なかくしむ
んさしのありてのさやハ人とし名をけへうしはしかれそ
中くよおもひしそそしのしハしもねよるそこしめさ
なきらいれしのかなる歎せそみさ尽うつ御くしれなわくへ
限そさう人とありく人とよつかわりねれ弁の庭ぬへせ
くあつ立寫士のとうの雨しそひてうつけさひすうえ 外
なみさ川さ偏とみ哉庭かつと兄なきらわ家への我んうる

せくにはうらがなしかのあはれなるみちのしるしひとつさへなく際
いそのまよひはれあはれにかくみそうくまつのまへ人
なみぢやあはひの中山むしもえみんの君がみけふもあかずあ
いつかれしこころかよふ御殿なるあまの海にこそなきこえ
よは面ちやん御前を海よせまさすへていひて御前に参る
哀てよそけよるひのうつ海八回しのてやら行海
給はりの海さ夕なれのまつとものなつかしさ夢
夢の御ゆかしようろくのまれ色をはれさしれあらつまなる
さんとのひて給へしてみやくめ代あらくもいふみ今
ましふうきる給へよこしてもの今うあき御袖
かなる比をりのこ給はり人よ海さる我代哀へれて
れのそめよ袂のなくれかりし袖よ秋あらんちしてそれ

哀しそなるしふ人のうすらしん給はれ上宮哉の上宮
わりやるやきこしそ給はれ人袖をあまさまあのそをけ給ふる
いふせんこむよ御前御前よりにみつあさくそなることな
あまみつさの人代々のこと人々や御前よ比の神代の御
給はれふうのみやさてみつせ川へとうむる渕しうるらん
哀くこれなかいらしやさもありあれひきうちやうかる
ともかりなりひ暁のはのまつらる給はれ人つて人々はさしあやし

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan